

伊藤航多・佐藤繭香・菅 靖子編著

『欲ばりな女たち』

——近現代イギリス女性史論集——

彩流社 二〇一三・二刊

四六 四〇〇頁 三五〇〇円

本書は日本の近現代イギリス女性史研究における最新の成果をまとめた論文集である。「知に挑む」「生を織りなす」「人をつなぐ」の三部から成る本書に収録された十本もの論文すべてにここで言及するのは難しいと思われるため、「はしがき」にもある『女性らしさ』という規範を抛り所にする¹ことで、社会的な活躍の場を広げていく²（三三頁）女性の姿が特にはっきり表れていると思われる論文を、それぞれの部から一本ずつ紹介することとする。

第一部「知に挑む」では、出島有紀子による第三章「医師登録制度とインドの恩恵―ヴィクトリア時代の女性医師」がとりわけ興味深い。「女性らしさ」の観点から看護婦が女性の職業として歓迎されても医師は白眼視されていた時代、女性医師たちは風当たりの強い本国よりも、医師や最新の医療技術が不足した植民地に活路を見出した。彼女らは植民地において、男性医師に診療されることをためらう女性患者を診察することによって、女性にこそ可能な医療を実現し得たのである。

第二部「生を織りなす」からは、真保晶子による第四章「消

費者としての女性―家具の購入における主導権とデザインへの参加、一七七〇〜一八五〇年」を紹介したい。サービスの提供者ではなく受益者に光を当てる視点もさることながら、受益者たる女性が提示された商品を受動的に選んだわけではなく、むしろ能動的に製造元と交渉したという指摘は斬新である。そこから見えるのは分離領域^{セパレート・スペース}たる家庭に閉じ込められているのではなく、そこで頼もしく采配を振るう「主人」たる女性の姿である。

第三部「人をつなぐ」の中では、山口みどりによる第八章「教区のアイドルから教区の女王へ―英国国教会牧師館の女性たち」を紹介したい。牧師夫人は教区女性のリーダー役を担いつつ、夫の補佐として司牧に携わることも稀ではなかった。さらに、牧師の家庭に育った娘は夫人たる母親に社交の方法などを仕込まれているため、そこを見込まれて自らも牧師と結婚する例が少なくなかったという点は、第二章「歴史を紡いだ女性たち」で描かれた歴史家の妻たちにも通じる。特殊な専門職に、それも自ら就くのではなく嫁いだ女性たちは、妻として夫を支えつつ、独立した一人の専門家としても振る舞い、またそれが求められてもいたのである。

歴史記述においては社会規範と闘った少数の「目立つ」女性たちだけが注目されがちな一方で、大多数の「ふつうの」女性たちは表層に表れにくいながらも確かに存在してきた。彼女らは決して唯々諾々と社会や男性に盲従したのではなく、置かれた環境下で求められた（時にはそれ以上の）役割を立派に全うしていたのである。本書はそうした女性たちにもしっかりと目を

向けていくという決意を窺うことのできる意欲作であり、続く研究が期待される。

(八谷 舞)